

SHINGON HORONIC

色

IRO

は

WA

匂

NIO

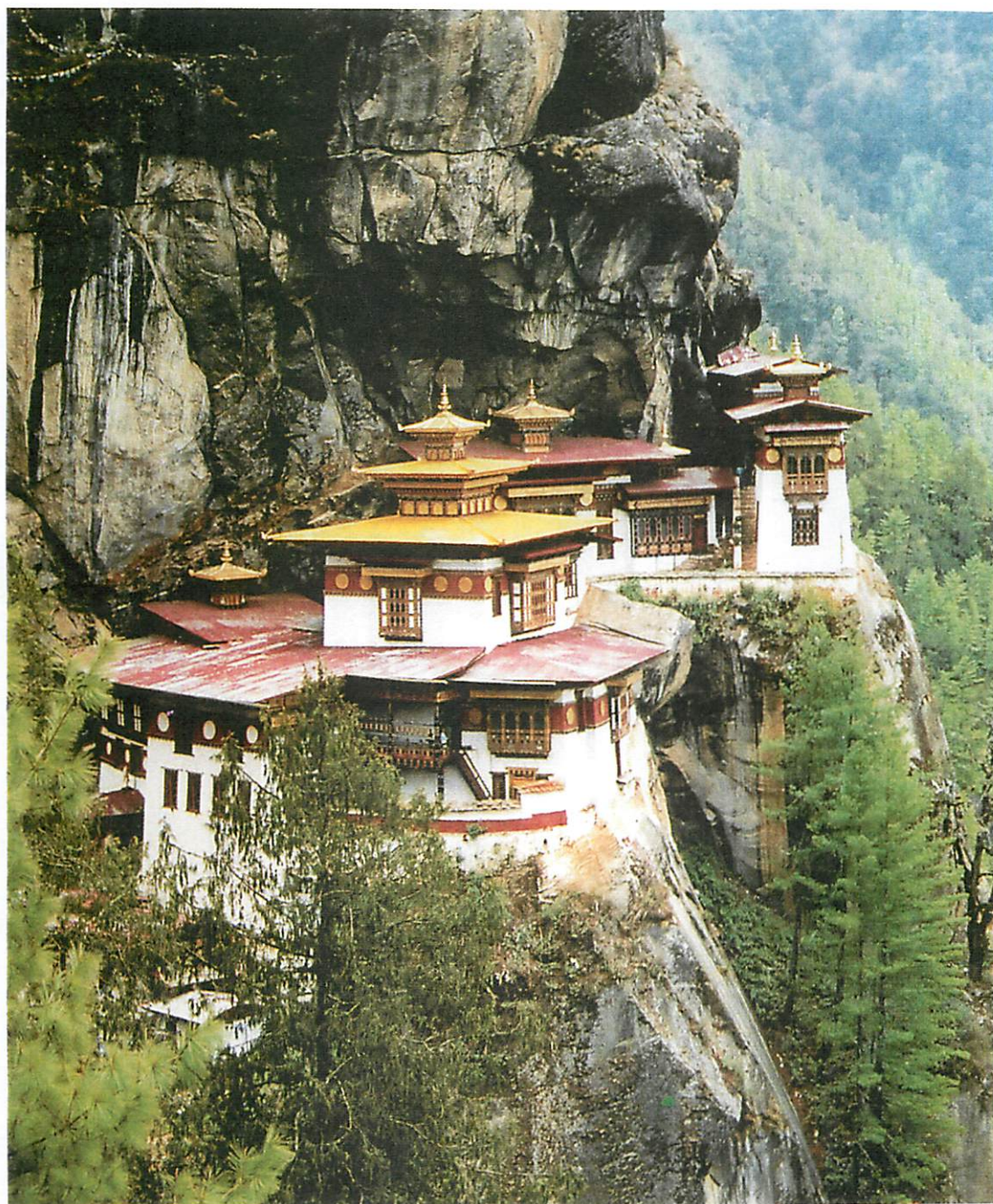
へ

E

ど

DO

II



特集 ヒマラヤの仏教王国 ブータン

平成十八年夏

第四卷



PHOTO K_KEI

虹は龍神が水を飲みにくる姿

虹が立つことを

「ノギ（虹）が吹いた」とか

「蛇^{なま}が吹いた」という地方もあります

虹の語源は蛇であり、ナギであり、イザナギのミコトのナギにも通じます。蛇は不死、再生そして長生の智慧を象徴する神聖な生物です。世界中の古代宗教の神に蛇の姿が見られます。

大和三山の三輪山の^{おおものぬし}大物主もそうです。

インドではナーガといっています。

ナーガは龍神であり龍神の女性形はナーギニーです。ナギがノギやノジになり、やがて虹となった様です。

虹が立つ時の気配は得難く深く記憶に残ります。

虹は吉兆。

写真はブータンの虹です。

ブータンは雷龍の国。

特集

ヒマラヤの

仏教王国ブータン

3

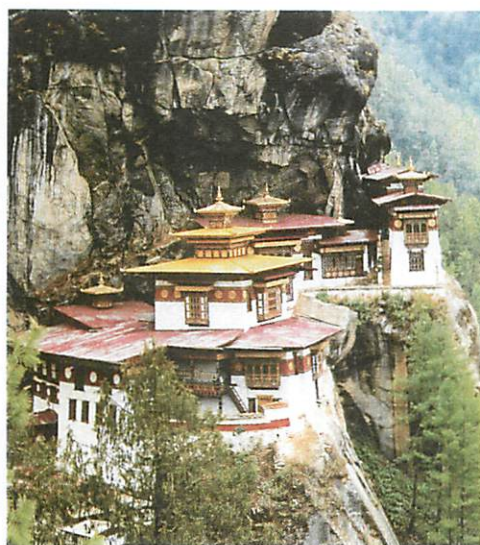


PHOTO K_KEI

心の絵ことば 11



お大師さまの言葉

13

14

情報コーナー

松本幸四郎
弁慶の
カーテンコール

歌舞伎役者で
MUSICAL STARでドラマにも出ていて。
こんな人、他にいます？
——三谷幸喜

最新刊 知恵の森文庫
マダマが当たります！

君たちは
どう生きるか

いま、何を
無

福島慶道

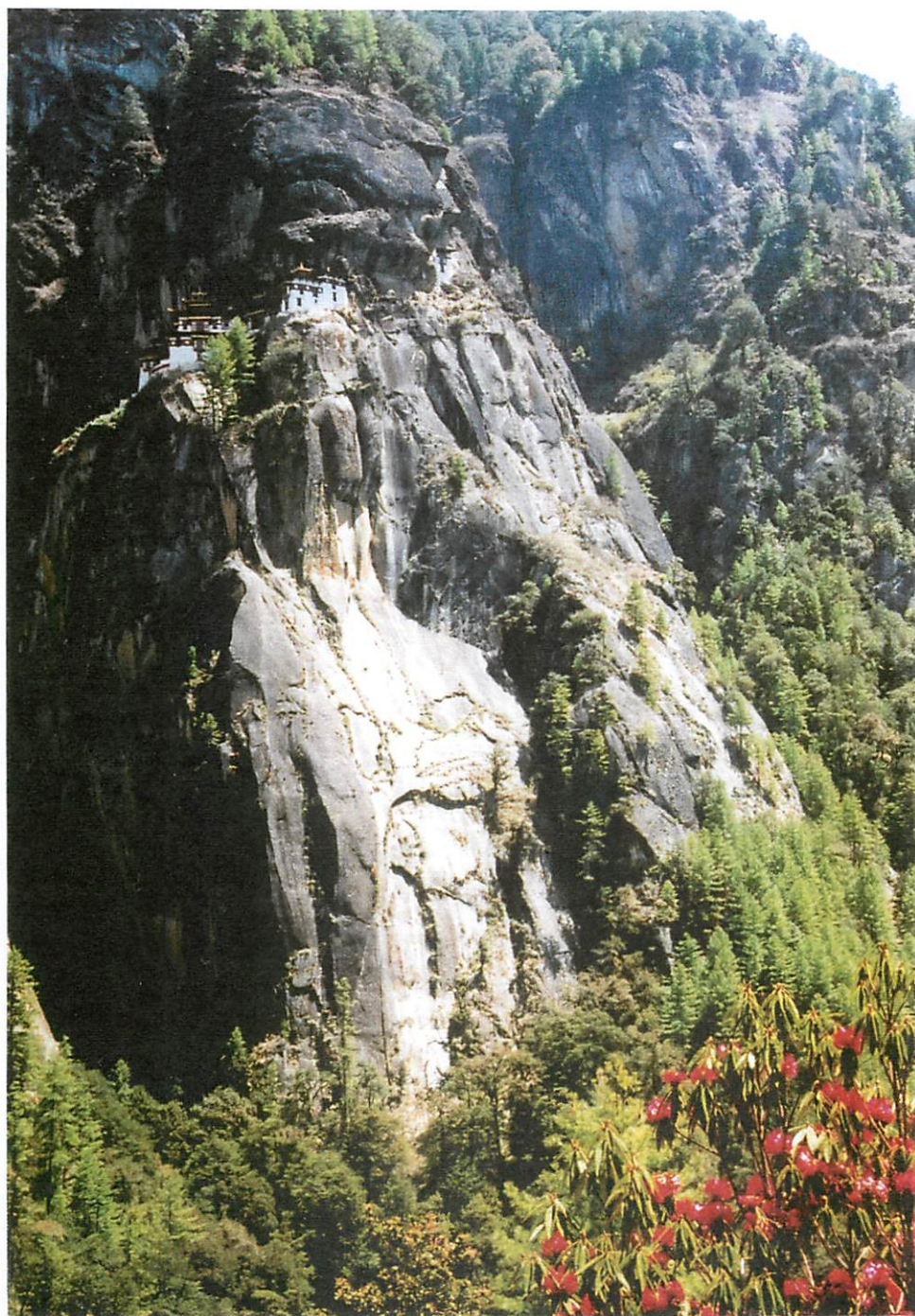
書 158
岩波文庫

『君たちはどう生きるか』とは単なる教養ではなく、
生き方そのものに他ならない。
著者が、自らの生涯を辿りつつ、
くくく（このころ）と（人物）を語る。

岩波社刊 文庫（本体1400円＋税）



ヒマラヤの仏教王国 ブータン



標高3000メートルの高さにある僧院、石楠花の花が美しい。

＊マニ車 お経が一巻入った筒で、一度まわすと、お経を一巻となえたことになる。左下の写真の左側の巡礼者が右手に持っている



空中の聖域 タクツァン僧院

ブータンにはタクツァン僧院という聖地があります。ブータンだけの聖地ではなくヒマラヤ全域に広がったチベット密教の最高の聖地の一つです。

チベットからパドマサンババという僧が虎の背中に乗って、ここタクツァンにやってきました。そして長い瞑想の後、ブータン土着の神を調伏し仏教を広めました。八世紀のことです。それ以来、タクツァンは聖地として多くの巡礼が訪れるようになりました。十七世紀には僧院が建てられました。

現在もブータンはもとより世界中から善男善女が参詣しています。

タクツァン僧院は海拔三千メートルを超える切り立った岩盤の上に建立されています。町から見上げると人を寄せつけないような厳しさが感じられます。しかも人が登れる道さえ見えません。動物でもあそこまで登るのは不可能かと思える絶壁です。

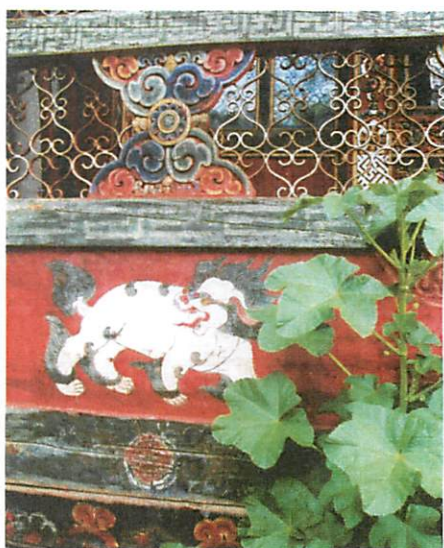
海拔二千五百メートルのところに登り口があります。そして二千八百メートルの展望台までは馬で登ることもできます。展望台まで約一時間かかります。学生や荷物を運ぶロバを曳く人。家族連れで登ってくるブータンの人。マニ車を回しながら登る人。ヨーロッパの人やアメリカの人々も登っていきます。

途中少年僧が二人、馬と一緒に降りてきました。きっと市場に買い物に行くのでしょう。展望台で休むと、その先はいよいよ聖域に入った感じがします。鬱蒼とした巨樹と巨岩の間を進み、灯明を供える場所があり、そこから今度は一挙に百メートル下がると山頂から瀧が流れ落ちていきます。その水を頂き心身を浄めて僧院まで今度は狭い石段を登って行きます。僧院はまさに聖地、自然に感謝の気持ちが溢れてきます。

町中の壁に仏教のモチーフが描かれる



PHOTO K_KEI



左 六道輪廻マンダラ 右獅子図

ヒマラヤの仏教王国

ブータンは南をインドと深い密林で接し、北にはヒマラヤがそびえその向こうにチベットがあります。このヒマラヤにはかつて四つの王国がありました。ブータン王国、チベット王国、シッキム王国、ネパール王国。しかしチベットは中国に蹂躪され、シッキムは南からの大量移民が過半数となり、国民投票でインドに組み込まれてしまいました。

こうした中でブータン国王は鎖国します。そして同時にブータン国としての独立と誇りを守るために二つの政策をたてます。一つは国民がブータンの伝統衣装を着ること。そして建築はすべてブータン様式で建てることです。

国民がブータンの伝統的な服を着ることで、伝統的な織物や生糸の生産、染めの技術が絶えることなく伝承されています。

建築も飛行場からサッカーのスタジアムにいたるまでブータン様式で建てられます。建築は幅広い技術が必要になります。そこにも伝統的な技術や智慧が受け継がれていきます。日本では腕の良い大工さんがその技術を発揮できず、プレハブ建築を建てています。左官職人の技術は薄っぺらな壁紙に取ってかえられています。昔は年末に見られた畳替えをする職人の姿も消えつつあります。

そして最も大切な心の拠りどころとして仏教の教えが国のすべての基本となっています。ブータンは国王親政であり政治宗教が一致しています。政治行政のための建物はゾンと呼ばれます。そのゾンは巨大な寺院でもあり大勢の僧侶が修行し生活しています。

ゾンに入る時は一般男性は白いカムニという袈裟のようなものを左肩からかけます。カムニは地位によって色が変わります。女性はケラという布を左肩にかけます。



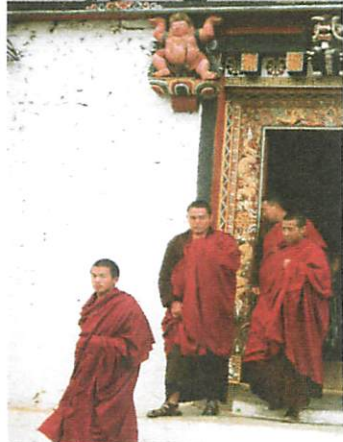
かつて要塞の機能もあったゾン



ゾンを通る女性 左肩にケラをかける



男性は白いカムニを



ゾンの中で法要を終えた僧侶たち

緑豊かな春

野外での授業風景（右）
ブータンの国技は弓
最近では伝統的な竹の弓より
アーチェリーが人気（中）
ルールは昔と同じで仲間が的を
射ると輪になって祝歌を歌います（左）

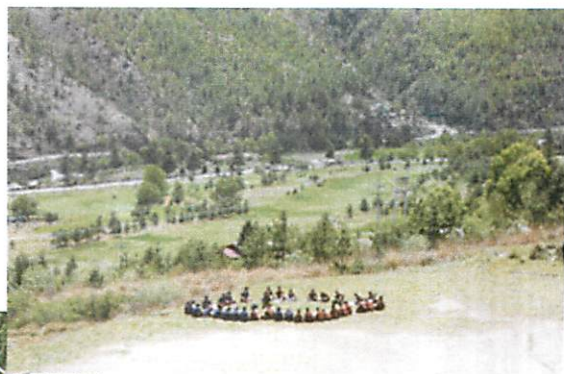


PHOTO K_KEI



優しきブータンの人々

ブータンの人々の顔や表情は日本人にとっても似ています。

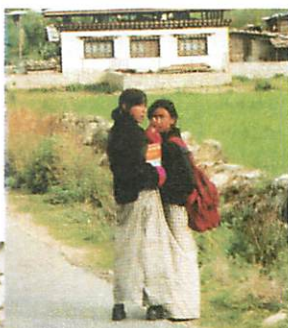
私は仏教の歴史がある国はほとんど訪れています。中国もシルクロードの奥を含めて数回訪れています。インドも何度も行きましたし、タイやカンボジアそしてガンダーラの遺跡のあるバキスタンにも行きました。しかしブータンの人々ほど日本人と違和感のない国は他にありません。

ブータンの男性の着物はゴといいます。床を引きずるほど長い着物を、膝丈にたくしあげて帯で結びます。このゴの仕立て方と着物の仕立て方とは、他の国に無い共通点があるそうです。

またブータンは、そばを麺にして食べる国です。日本以外では唯一です。

女性はケラという布を肩からかけますが、この布をおんぶ紐としても活用します。

私たちの仲間がタクツァン僧院からの帰路で高山病で倒れてしまいました。高山病は少しでも低いところへ降ろすことが大切です。私たちのガイド、ジュルミさんが背負って降ろすといひます。しかし険しい山道です。上りほどではないにしても、降りるのも大変な急坂です。ジュルミさんはさつと背負うと、急峻な山道を飛ぶように降りて行きます。私たちが追いつけないほどの速さです。途中で往きに一緒だった家族連れに追い付きました。すると子供を背負っていたお母さんがすぐに、おんぶ紐にしていたケラを取ると、私たちの仲間の背中にしっかりと結んでくれました。胸の中が熱くなりました。ジュルミさんはさらに足が早くなりました。さらに降りるといつまでも帰ってこない私たちを心配して運転手さんが待っていてくれました。



国民総生産より国民全体の幸福を

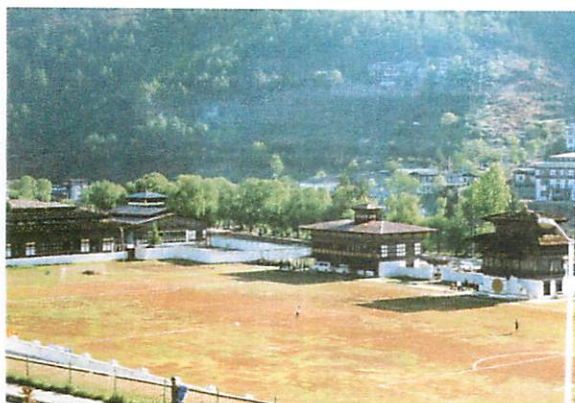
世界中の国がGNP、国民総生産をあげることに汲々としていますが。しかしブータン国王は「GNPよりGNHを」という有名なスローガンを打ち立てます。「グロスナショナルプロダクトよりグロスナショナルハッピネスを」

こんな素敵なスローガンを打ち立てる国王です。いつも国中を回って子供達とバスケットやサッカーをしているそうです。そして国の民主化にも努めていて近い将来引退を示唆されています。国の運営がうまくいって、国民からも尊敬されていてなぜ身を引くのかという疑問があります。

国王は「すべてがうまくいっている時に変えることができる。悪くなつてからシステムを変えることは容易ではない。」と。

実際にはブータンは食糧もエネルギーも豊富です。米も豊富で美しい棚田が山間の谷に広がります。冬は麦を育て夏は米です。野菜も驚くほど豊富で味も力強く滋味豊かな美味しさです。

ブータンは高低差のある険しいヒマラヤの斜面にあるので、物流は大変です。ブータンの西から東まで百五十キロですが、車で移動しても六日かかります。山々と谷を縫って行くからです。その谷には水量豊かな川があり、水力発電が盛んで、インドから南アジアをカバーできるそうです。



2002年もう一つのワールドカップが開かれた
サッカースタジアムもブータン様式



高級ホテルの中庭



川の両側の市場を結ぶ橋も美しい



把手にも密教法具のモチーフが

農業にも仏陀の教えが

西岡京治さんという日本人がブータンの農業振興に尽力しブータンに骨を埋めました。今でも西岡さんはブータンの人々から尊敬されています。西岡さんはブータンの農業を見て国王に進言します。

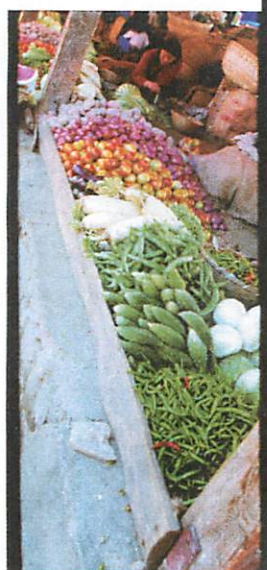
「農業をわずかも使えば農業生産は飛躍的に良くなります。」と。

しかし王様は

「ブータンは仏教の教えがあります。その教えの中に不殺生、殺すなかれという大切な教えがあります。これは人を殺めることはもちろん、できる限り小さな命も守るということです。」

ブータンでは殺生を少しでも減らし小さな虫の命も大切にすることで園芸や農作業をしてはいけない日があります。

ブータンは絹織物も盛んです。しかしそこにも仏陀の教えが生きています。絹糸をとる繭はすべて幼虫が成虫となって飛び立った後の繭を使います。幼虫を殺して生糸を取ることはしません。



左から ゴーヤやダイコン 唐辛子の山 赤米と白米 農村風景



右から二人目がガイドのジュルミさん。奥様は日本人。

近代化が進むブータン

テレビ放映が始まり、インターネットが繋がり、携帯電話が急速に普及しはじめたブータンは変わりつつあります。この近代化の荒波をいかに上手く乗り切り、ブータンの善き伝統を次の世代に繋げるかが大きな課題です。しかし王様のかかげるスローガン「GNPよりGNHを。国民総生産より国民すべての幸福を」が、必ずブータンを素晴らしい未来に導くと思います。

ブータンを知るための本
左 『ブータン』 今枝由郎著
大東出版社

下 『虹と雲』 ブータン王妃著
平河出版社
(資料提供 K_K E I)



ジャータカ物語 山犬と百獣の王

絵 きらら

百獣の王ライオンが子鹿を追っていました。あと一步のところのせまり飛びかかりました。

鹿はさつと身をひるがえしました。そこは泥沼でした。身の軽い子鹿にはただの浅い沼ですが、体重の重いライオンにはたまりません。たちまち足が取られ、ずぶずぶ体が沈みはじめました。

頭の良いライオンはじつとして身動きを止めました。泥沼ではもぐくほど体が深く沈むのです。

ライオンは何日もじつと我慢していました。

そこに山犬が通りかかりました。

「山犬君、ここから私を助けてくれまいか。もう一週間もこうしているんだ。」

「それはお気の毒です。でも私は人助けをやめたんです。」

「なんで山犬君は人助けをやめたんだい。」

「いつも裏切られるからです。助けてほしい時はみんな都合の良い事をいいます。でも助けると必ず後で裏切られるんですよ。中には余計なことをした、とかね。それどころか、私のせいでひどいめに会ったなんていうものもありますからね。」

「私は百獣の王だ。けして裏切らない。約束するよ。」

山犬は考えました。

いつも裏切られるんだ。その悔しさといったらないんだ。でもなぜいつも助けるんだろう。そうだ、助けた時の気持ちの良さだ。何か心がすがすがしい風がふくような綺麗な光が差し込んで心が晴れるような気がするんだ。だから自然と助けているんだ。

裏切られる悔しさと、助けた時のすがすがしさ。どちらが尊いだろう。決まってる。

「ライオンさん、助けてあげます。たとえまた裏切られても、あなたを助ける事にします。」

「決して裏切らないよ。でもなぜ私を助ける気になったか話してくれないか」



山犬は裏切られた悔しさより、助けたときの爽やかな心の方がはるかに大切だと話しました。

ライオンはすっかり感動しました。

山犬は自分の肩をライオンの体の下に入れて、ライオンを助けました。そして泥ですっかりよごれたライオンの体を洗ってやりました。

「さあ綺麗になりましたよ。これで立派な百獣の王です。」

ライオンは美しいたてがみを風になびかせ百獣の王の威厳をすっかり取り戻しました。その眼がキラリと光りました。山犬は思わずとび下がりました。

しかしライオンは笑って言いました。

「君の言葉を一生忘れないよ。王として森中の動物に君の言葉を伝えよう。」

それ以来ライオンと山犬は家族ぐるみで何代も友情を伝え続けました。

お大師さまの言葉

貧道黙然せんがために この峰に来住す

山高く雪深くして人迹通じがたし

私は独り静かに瞑想するためにこの峰に来ました
山は高く雪は深く人が容易に近付けません



ブータンから見えるヒマラヤ

PHOTO K_KEI

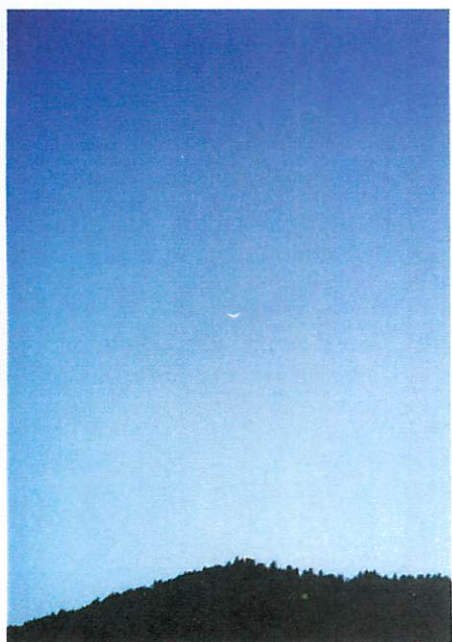
山の魅力は人を引き寄せます。しかし一步そこに踏み込もうとすれば山の厳しさが人を遠ざけます。

それでもあえて山に分け入り山の懐に抱かれると初めて見えてくる景色や初めて感じる気配があります。

厳しい道から逃げることは簡単です。

しかし厳しさに臨んで初めて得られる世界は、そこに臨んだ人だけが共有できる素晴らしい世界です。

この文は高野山に登られたお大師様が詠まれたものです。高野山の厳しさを謳っていますが、お大師様にひかれて多くの弟子たちが参集し、山上に壮大な密教伽藍、曼荼羅世界が建立されました。





『君たちはどう生きるか』

吉野源三郎著

岩波文庫

「君たちはどう生きるか。」という問で締めくくられた本書は1937年に刊行された古典です。前に紹介した山本有三さんの「心に太陽を持って」と同じシリーズの最後を飾ったのが本書です。中学生の主人公が自分の周囲の様々な出来事を感じながら、自分の生き方を見出す物語です。実に味わい深く、叔父さんとの会話が主人公の考えをより深く導いていきます。主人公は自分と様々な人々、そして万物が繋がっていることに気がきます。今に生きる私たちは一度縁や繋がりが関わりについて問い直すと生き方が見えてくると思います。



『いま、ここを無心に生きる』

福島慶道老師著

春秋社

東福寺は京都の名刹で訪れたことがある方も多いと思います。私は若いころ東福寺の塔中の龍吟庵によく行きました。堂守のお婆さんが抹茶をたてて和む一時は格別でした。

昨年友人の結婚式でひさしぶりに東福寺に行きました。戒師が管長の福島老師でした。式の後の宴で福島老師の飾らないお人柄や人をそらさない軽妙なお話に皆とても感銘しました。

老師は毎年2ヶ月以上もアメリカの大学で禅の講義を続けています。

本書はアメリカでの禅の講義の経験から編まれた一冊です。



『弁慶のカーテンコール』

松本幸四郎著

知恵の森文庫

松本幸四郎さんの活躍は歌舞伎の御最前連中もミュージカル通もテレビドラマファンの誰でも知っています。その幸四郎さんの60年の軌跡が楽しいエッセーで綴られています。そして絵も上手な御自身の手による挿画も楽しめます。

私自身、幸四郎さんの弁慶を観て歌舞伎が大好きになりました。またお父様の白鷺さんが亡くなられた日の弁慶も偶然拝見して、劇場全体に一つの波動が生まれ、それが響きあうという凄い舞台での感動はいまだに鮮やかによみがえります。常に新しい世界に挑戦し続ける幸四郎さんの新たな挑戦が楽しみです。



次号 特集 美山の朝茶事

Editor ABE RYUJU Art Director and Photographer/TATSUKI Editorial Staff/ SAMURO MIWA BIKUN BIKOH BIUN
 EDITORIAL OFFICE CHOEN-JI S.H.C Making Mechanic Printing KORINKAKU
 〒 157-0076 東京都世田谷区岡本 1-20-1 電話 03-3707-1228 ファクシミリ 03-3707-1221